

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 全国歴史教育研究協議会

(代表者 山 崎 茂 会員数 約16,200人)

T E L 03-5261-9771

1 は じ め に

今年度の大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の分析を終えて、ここ数年来の傾向を継承し、問題の内容やレベルともに教科書に準拠しており、日常の授業でほぼ対応できるものになっていることは、センター試験の本質を踏まえたものとして有り難く受け止めている。その一方で、例年指摘させていただいているように、解答するに当たっては、ほとんどの設問がリード文や図によらず、設問の文だけを読み、世界史の知識・理解のみで対処できるようになっている点が改善されていない点が残念である。

学力の3要素として、学校教育法第30条では「基礎的な知識及び技能」「思考力・判断力・表現その他の能力」「主体的に学習に取り組む態度」をあげている。これらを高等学校「地理・歴史」にあてはめてみるならば、歴史的事象を時間軸や空間軸など多元的な観点を踏まえた視点から検討したり、複数の事象間の関連や因果関係を考察したりすること、歴史的事象についての様々な解釈を比較してどちらにより客観性や妥当性があるかを考えたりすること、つまり歴史的思考力を涵養することであるといえよう。

センター試験では、基礎的な知識の確認はなされているものの、思考力・判断力の確認、すなわち歴史的思考力を発揮して解答に至るような問題という点においては不十分であると思われる。出題者の方々が意欲的にテーマ設定やリード文作成をしてくださっていることは、問題をみただけで十分に読み取れる。設問も一貫してそのテーマに沿うとか、リード文を熟読する中で解答のかぎが引き出されるような思考力を問う設問とか、リード文の全文を読まなければ解答できないなどの仕掛けを用意していただくことを、今後ともぜひ御検討いただきたい。同様に、地図や写真、図や表なども、また然りである。マークシート方式という制約があるにしても、もっと設問と関わらせる余地はあるのではないか。センター試験が、大学入試問題のスタンダードたるべく、さらなる御検討いただければ有り難い。

以下、今回のセンター試験「世界史A」と「世界史B」の試験問題について、限られた紙面の中ではあるが、御検討の一助となることを願って、本協議会としての意見と評価を記す。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

(1) 「世界史A」について

昨年同様、「世界史B」との共通問題はなく、大問3題、小問33問であった。

時代別の出題は、正解を基準として選択肢から判断すると、前近代が6問、前近代と近代に関わるものが2問、近代が13問、近代と現代に関わるものが2問、現代（高等学校学習指導要領「(3)現代の世界と日本」に該当する部分）が9問、うち第二次世界大戦後史が3問、前近代と現

代に関わるものが1問であった。全体の割合で言えば、「近現代史を中心とする」高等学校学習指導要領の目標にほぼ合致した内容であった。

分野別では、政治史の知識・理解を問う問題が23問と大きな割合を占め、文化について問う問題が4問、経済について問う問題が6問で、昨年と比べると経済について問う問題がやや増えた。

地域別では、非欧米地域は14問、欧米地域が14問、全地域に関わるものが5問である。昨年同様に諸地域からバランス良く出題されており良い。

問題形式では、正しいものを選ぶ設問が13問、誤っているものを選ぶ設問が4問、空欄を補充する問題が7問、二つの正誤組合せ判定が8問、年代順に並び変える問題が1問であった。例年と比較して空欄を補充する問題が多い。地図が3点、図版が3点、グラフなどの統計資料が1点、使用された。図版や統計資料を用いる意図も適切であり良い。

第1問 「国際秩序の歴史」

Aは江戸幕府成立後の日朝関係に関連しての出題。

問2③の足利義満は中学社会の歴史分野でも扱う内容なので良いが、問2①②は前近代史の内容で教科書に記載されていない場合が多い。受験者が不利にならないようご配慮願いたい。問3の選択肢Bは文章が曖昧なため正誤の判断がしづらい。作問する場合には、紛らわしい文章ではなく、内容で正誤を問うようにお願いしたい。問4の地図と組み合わせた出題形式は良い。ただし日朝修好条規で設置された開港場の地名と位置まで問うのはやや細かい。

問1から問3はリード文と関連せず、選択肢の文章も荒削りで、作問全体が雑な印象を受ける。

Bはスペイン現代史に関連しての出題。EU危機とも絡む時事的な問題であり良い。リード文中のフランコ、ファン＝カルロス1世はやや細かいが文中のものであり特に問題ない。

問5①のレパントの海戦はやや細かい。

問7でヨーロッパ経済協力体（EEC）、ヨーロッパ共同体（EC）の発足時の加盟国を問うのは難しい。問8③のレザー＝ハーンはやや細かい。

Cは第二次世界大戦後の東アジアに関連しての出題。

問10①は受験者がドイツ民主共和国を東ドイツと判別できるかどうか疑問である。問10④ティトーは教科書本文に記載されていない場合も多くやや難しい。

問11はソ連外交史の年代順に並び変える問題で良い。ただし年代の並び変えは苦手な受験者も多いため難易度は上がるだろう。

第2問 「世界史上の地下資源の活用について」

Aはハンガリーの温泉に関連しての出題。興味を引く内容だが、図版がただの挿絵なのが残念。

問1は正答を選べるので問題はないが、①ショパン、②トルストイは教科書によって記載がないものもあり、やや細かい。

問2は「エネルギー資源の活用」ではなく「産業革命について」と記した方がわかりやすい。産業革命に関連するクロンプトンやワットなどの人物や機械は、多くの場合欄外の表などに記載されるだけで本文に説明がないため、やや細かい。

Bは南アフリカの金に関連しての出題。

問5は地図を用いた問題で出題形式は良い。ただしトランスヴァール共和国について本文中に記載されている教科書は1冊もなく、欄外の地図中に記載されている例もごく僅かであり極めて難しい。同様に問6①のオーストラリア連邦、問7のアフリカ史全般、問8選択肢Bの金本位制の停止も「世界史A」の設問としては難しい。

Cはドイツの世界遺産「ツォルフェライン炭鉱業施設群」に関連しての出題。図版がただの挿絵である。

問9の産業革命に関連しての人物名は前述の通りやや細かい。

問11はグラフから読み取る問題で歴史的思考力を問う良問。ただ選択肢から年号を特定できないと導きだせないため難しくなっている。設問そのものは良いので、さらなる工夫を求めたい。④のオタワ会議はやや細かい。

第3問 「食物や嗜好品の歴史」

Aは古代ギリシアの四体液説に関連しての出題。リード文の内容そのものは興味をひいて面白いが「世界史B」の設問として出題したほうがよいだろう。

問1③ペロポネソス戦争は教科書の記載がほとんどなく難しい。

問2の選択肢A塩の行進は教科書の記載にばらつきがありやや細かい。

問3食品の原産地を問う意図は面白いが、③サトウキビを選ばせるのはやや難しい。コーヒーなどの品目に置換えてはどうか。問4④トルデシリャス条約は教科書の記載がほとんどなく難しい。

Bはイギリスの茶貿易に関連しての出題。

問5は地図を用いた問題。ボストン茶会事件の場所を問うもので良い。

問6は18世紀から19世紀のイギリスの貿易を理解させる問題。地理的空間認識をふまえイギリスの産業・貿易構造についても理解させる良問。

Cは中華料理の地域性に関連しての出題。

問9④のストルイピン、コルホーズは教科書にほとんど記載されておらず難しい。

最後に、毎年お願いしていることだが、「世界史A」を作問される先生には高等学校学習指導要領を熟読の上、各社の「世界史A」の教科書を精査して作問に当たっていただきたい。「世界史A」の受験者は、「世界史A」専用の参考書などがほぼない中で、教科書のみで学習するケースが多いと考えられる。一方で、「世界史A」の教科書は、各社の特色が色濃くでており、記述内容は様々であり、取り上げられている事項も異なる。「世界史A」は「世界史B」の内容を薄めたものではない。高等学校学習指導要領の趣旨・内容に沿った上で、是非とも「世界史A」で受験する生徒の立場に立った作問をお願いしたい。

(2) 「世界史B」について

今年度も本試験と同様、大問4、小問36問で妥当な問題数だった。六者択一問題は、問題番号29のみで昨年より減少した。正答選択肢を基準として出題を年代別にみると、近現代史が12問で全体の3分の1を占めていたが、昨年度目立った第二次世界大戦後が単独で1問もみら

れなかった。一方、古代・中世は18問で全体の半分を占めていた。地域別では古代ギリシア・ローマを含めたヨーロッパ史が14問で多く、昨年同様、中国史は単独問題が少なく、周辺諸地域と関連させたものが多い。

西アジアを中心としたイスラーム世界は、単独で5問、中国との関連で2問と例年以上に多く出題された。出題分野は、政治史が中心になっているとはいえ、第2問が学問と科学の歴史に関する出題であり、第3問が建築とそれを支えた文化に関する出題であったことから文化史単独問題が全体の3分の1以上みられた点特徴的である。政治史偏重を避ける出題者の意図は高く評価できる。

第1問 世界史上の帝国や王朝の衰退・滅亡に関するもので大学入試頻出テーマである。

Bの問4は、梁の武帝の在位期間が分からなくても説明文が十分なヒントになっている。

Cの問7の年表空欄補充問題もスペイン王政が倒れたことがスペイン内戦勃発時期を考えるヒントとなる。全体的に基本的な良問が多い。

第2問 学問と文化の歴史がテーマになっている。

Aは、イスラーム文化史に関する文章で16世紀の絵が補助資料として使われている。

問1の正誤組み合わせ問題は、aのアズハル学院がやや難問である。

Bの問6は、中国の技術・技法のイスラーム世界への伝播に関するリード文と整合した良問である。

第3問 建築とそれを支えた文化がテーマになっている。

Aは、鐘楼に関する文章で写真や絵が資料として使われている。

問1の正誤組み合わせ問題でa クトゥブ＝ミナールは教科書に写真が掲載されているが本文がなく、難問である。Bの文章の補助資料、東京ジャーミーの写真は面白い。

問4の③ミスルがアラビア人ムスリムにより築かれたことを問うのは、やや難問である。

問6の正誤組み合わせ問題でbのワクフもやや難問。

Cは、ロンドンの公共建築物に関する文献で3枚の写真が補助資料として使われている。

問8のビザンツ様式の建築物として④サン＝ヴィターレ聖堂を答えさせる問題は、ラヴェンナという地名の提示が必要であろう。

第4問 「周辺」に位置づけられた地域や人々の歴史がテーマになっている。

Bの問5は燕雲十六州の位置を地図中から選択させる良問である。

Cの問7、銅鼓とドンソン文化を答えさせる問題は、過去にも類似問題が出た。ヴェトナムを中心とした東南アジア史を大陸部や島嶼部などの地域ごとにおさえておく必要がある。

絵画や写真は、補助資料的な使われ方とどまっている点が惜まれる。提示された資料を活用して読み取る問題や史料を使った問題作成が望まれる。また昨年同様、今年も地図を活用した問題が1問だけであり、もう少し問題数を増やした方がよいであろう。各文章中のアンダーラインを広い範囲にわたる設問が設定できる箇所につなぐことで、下線部と問題文との整合性が図られている。問題の難易度は、部分的にやや難問がみられるものの大部分の問題が教科書の内容を逸脱しない基本問題であった。また今年度は、本試験の平均点が上昇したため追・再試験の方がやや難しく、本試験に比べて年表を使った問題や同時代史的な年代を問うものが少なかった。世界史は理数系科目で

はないのだから、新学習指導要領の本格的な実施に伴った移行措置的問題も出題してほしかった。特に地理や日本史と関連させた問題の作成を次年度以降は、工夫してほしい。

3 ま と め

今年度のセンター試験も、例年通り、基本的には我々の日常の教育活動を踏まえたうえで作問されており、取り上げられたテーマが世界史の学習において示唆に富むものであることは、率直に評価したい。

しかしながら、やはり例年と同様、知識・理解を問う無難な説問が多い。問題の作成に当たって、極めて多種多様の制約がある中で、意欲的に新たな問題分野を開拓することが困難な状況であるということは推察した上で、あえて苦言も呈した。それは、このセンター試験が入学試験のスタンダードとして、全国の高校生にとっては世界史学習上の極めて重要な基準のひとつになっており、私たち高等学校世界史教師にとっても、授業の内容・方法等を考える上で、やはり重要な参考資料として受け止めているからこそである。センター試験が、より一層私たちの教育活動の指針にできるものとなることを願って止まない。

また、「世界史 A」については、科目の性格・特性にやや配慮に欠く出題もみられた。「世界史 A」は、教科書によって記述内容に大きな開きがあるいっぽうで、よるべき参考書や問題集がほぼない状況である。教科書でしか勉強ができない受験者への配慮をお願いしたい。

なお、例年指摘させていただいている各教科間、とくに「B科目」間の平均点のばらつきについて、今年度は最小限に留めていただいた。問題の難易度や他教科との平均点の差などの、いわば受験科目による「運・不運」によって受験の結果が左右されずに受験者の学力が評価され、極めて好ましい結果となった。関係者の方々に敬意を表するとともに、次年度以降も平均点のばらつきがないように努力していただきたい。

センター試験のより一層の充実を期待して、本協議会の提言としたい。